様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４１５

研究課題名（和文）自然談話文法構築のための、談話標識の機能に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study on the function of discourse markers in Japanese spontaneous speech

研究代表者
甲田　直美（KODA, Naomi）

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：４０３０３７６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自然談話の文法を構築するために、自然談話で特徴的に用いられる談話標識の機能の解明を行った。談話標識の解明のためには、まず自発的談話の特徴について、情報の圧縮度、自己関与性、計画性等の特徴を加味し、自発的談話に用いられる言語表現を実証的に捉える必要がある。自発的自然談話の収集と、各談話に見られる言語指標の整理→発話交替や発話重複、発話の途切れ等、会話構造における談話標識の機能の解明→自然談話の文法論構築の基盤的研究を行った。

研究成果の概要（英文）：This research focused on the function of discourse markers in Japanese spontaneous speech, and analyzed from grammatical and acoustic aspects. As a clause chaining discourse marker, I studied conjunctive particles in way of clause chaining and turn taking in Japanese intraconversational narratives, acoustic features of clause-chaining in story telling, sequence organization and the resumption of turn taking system, and reported thought and speech at the achievement of story telling. This study focused on the construction and design of using reported thought and speech in the resumption of turn-by-turn talk after telling stories. With respect to the suspensions of turn-taking, reported thought and speech is recurrently found in a specific sequential environment; that is crucial point of the story and is often the action the recipients respond to. The teller contributes toward bringing about a change in the participation framework that helps to mark the end of the telling.

研究分野：言語学

キーワード：会話分析　談話標識　語り　会話　コーパス

１．研究開始当初の背景

発話連鎖の語用論的発話解釈と談話標識、接続表現の対応について、『談話・テクストの展開のメカニズム－接続表現と談話標識の認知的考察－』（2001 年度研究成果公開促進費）として公表した。この考察は、一貫して行ってきた、談話標識と接続表現が文章・談話の結束性に与える役割と効果について言語学的視点から考察したものであり、1996～1997 年度科学研究費補助金「文章・談話における談話構造理解のための、談話標識及び接続詞に関する研究」による考察を発展させたものである。その後も文章・談話における言語構造の研究を続け、2000～2001 年度科学研究費補助金「物語テクストにおける事態の再現性と文法的文彩の表現効果について」考察を行った。しかし、文章・談話の自然な文連鎖は、言語内の結束性のみならず、言語を理解する読み手側の補完的理解の働きによっても支えられている。文章・談話理解における、文脈を理解する際に用いる知識構造や推論の役割については、読み手側の特性に関する読解時間や記憶を指標とした心理学的手法により、主に英語を題材とした欧米の研究によるデータが蓄積されていた。文章・談話を実際に生じた言語と見るとき、単なる情報の羅列と言葉の字義通りの「理解」ではなく、そこには言葉を理解し、読み込む言語使用者の特性による影響が無視できないほど大きかった。そこで 2002 年から文部科学省在外研究員として米国マサチューセッツ大学へ渡り、Myers 教授とともに推論の測定方法と言語理解のオンラインプロセスの研究に従事し、文章・談話の理解の側面を求めた。日本語の文章構造は他の諸言語と異なることが多々指摘されており（Hinds, 1987. Reader versus writer responsibility: A new typology. Writing Across Languages Analysis of L2 Text.）、多言語との比較や読解プロセスについて調べることが重要であると考えられた。そこで帰国後、日本語母語話者が文章を理解する場合と、外国人日本語学習者が理解する場合の対比、そして、英語、タイ語、韓国語、中国語、アラビア語について、それぞれの母国語において、どのようなプロセスで理解を進展させているかを調査した（2003～2005 年度科学研究費補助金（研究課題名：「日本語学習者における「自然な文連鎖」の認識と文章理解、文章作成能力との相関の解明」）、2006～2008 年度科学研究費補助金（研究課題名：「テクストにおける「論証の仕方」と日本語学習者の文章理解・作成の相関の解明」）。しかし、まだデータは不足していた。異なる言語間、文化間におけるレトリックの嗜好性と読解ストラテジーの解明に加え、文章を読む個人の思考スタイルや読解ストラテジーの個人差について考察する必要があった。文章における論理（あるいは文化圏内で論理と思われている疑似論理）の受け入れ方は異なっていた。従来 Nisbett, R.E.を中心とする University of Michigan のグループが西洋 vs.東洋での比較を行っているが、彼らの議論は西洋-対-東洋と二極化しすぎており、言語構造の解明には枠組みの詳細さに欠けていた。そこで 2009 年度から 3 年間、科学研究費補助金（「読解促進材料が日本語学習者の文章理解・作成へ及ぼす効果の解明」）を得て、文章理解における概念図や要約、リード文等の読解促進材料の効果を検証した。ここに記した前半の研究は、接続表現と談話標識の言語学的考察から文章・談話を解明しようとしたものであり、後半の研究は、読解時間等の反応時間や理解度、読解プロトコルを用いて、文章理解のプロセスを解明しようとしたものである。文章・談話を聞いて理解すること、読んで理解することは、単なる「情報取り」や「情報の受け渡し」に終わるものではなく、その文章に含まれる議論の構造や用いられている文連鎖の論理のステップの理解をも含むものである。

もし文章の理解が単なる要点の把握・整理で済むならば、なぜ、理解の途上でつまずくのか、また、個々の表現の意味が分かるのに「話しの全体として何を言っているか分からない」という問に答えを与えることはできない。このような問いに対して、近年、自発的で自然な談話の収集が進んだことを受け、思考の流れとしての自然な文連鎖や言い淀み、情報の受領と確認等の認識と言語の対応を言語面から解明する道が拓かれた。国立情報学研究所による音声資源コンソーシアムの立ち上げや音声を含んだコーパス（『日本語話し言葉コーパス』（国立国語研究所, 2004）等）に見られるような、談話音声資料の一般配付や自然談話の精密な転写システムを求める動きである。

２．研究の目的

本研究は、自然談話の文法を構築するために、自然談話で特徴的に用いられる談話標識の機能の解明を行う。ここでいう談話標識とは、応答詞、あいづち、フィラー、接続詞、接続助詞、副詞、間投詞、連結詞を指し、従来の文法論では品詞的所属が必ずしも明確ではないが、共通して談話の構成と理解を解明するためには必須の語類である。談話標識の解明のためには、まず自発的談話の特徴について、情報の圧縮度、自己関与性、計画性等の特徴を加味し、自発的談話に用いられる言語表現を実証的に捉える必要がある。自発的自然談話の収集と、各談話に見られる言語指標の整理→発話交替や発話重複、発話の途切れ等、会話構造における談話標識の機能の解明→自然談話の文法論構築の基盤的研究を行う。

３．研究の方法

自然談話で特徴的に用いられる語彙表現として、談話標識の用法の解明を行う。ここ

でいう談話標識とは、応答詞、あいづち、フィラー、接続詞、接続助詞、副詞、間投詞、連結詞を指す。これらの談話標識の詳細な記述と用法の解明により、自然談話が内包する発話交換構造、情報の受容と理解・認識、対人的機能の働きが明らかになると考えられる。第一段階として、自然談話にみられる情報の非圧縮、自己関与、状況依存、計画性の有無等の要因が、分裂文や無助詞、言い誤りと修正、語の置き換え等、どのような具体的言語現象として出現するか整理する。第二段階として、得られた言語指標とともに、自発的発話の構成において、どのように談話標識が出現し、コミュニケーション上のどのような機能が担われているか考察する（例えばSchiffrin(1987) Discourse Markers では information state, participation framework, ideational structure, action structure, exchange structure が指摘されている)。しかし、これらの考察には、自然に生じた談話データの収集とその詳細な記述が前提となる。『日本語話し言葉コーパス』（国立国語研究所, 2004）は国内でみれば大規模の話し言葉資料ではあるが、講演や独話が多く、自由対話は 3.6 時間しか含まないため、自然談話が内包する発話交換構造を分析するためには、一般に配布や販売が行われている談話資料に加え、録画状況を加えたデータが必要である。すでに本研究課題開始のための準備として、2011 年度に 833 分間（ 13 時間）の音声付きコーパスを作成した（TEQCSJ:Tohoku Earthquake Corpus of Spoken Japanese, Tohoku University Corpus of Spoken Japanese 2011)。内容は主に大学生の自然会話であり、2011 年に勤務地で発生した東日本大震災にまつわるエピソードを含むコーパスと、これとは別の目的で作成されたコーパスの二種であり、音声とビデオ画像、転写データから構成される。これらは、2～3 名の対話が一組 40～60 分で収録されている。転写データは Jefferson(2004), Glossary of transcript symbols with an introduction. の会話分析の記述法に基づいたものであり、発話の重複や、切れ目のない接続（latching）やポーズ、沈黙等の発話間の時間的位置関係に加え、抑揚や引き延ばし、中断、強弱等の音声的特徴を紙面で再現しようとしたものである。これを進展させ, 最終年度に音声付きコーパス（TEQCSJ:Tohoku Earthquake Corpus of Spoken Japanese, Tohoku University Corpus of Spoken Japanese）を整備し, 1197 分（約 20 時間）の音声付きコーパスとして公開する。この資料収集と、これに基づいた自然談話の言語特徴の分析とを並行して進める。

４．研究成果

具体的文脈使用における談話標識を通して、「発話」実態の解明を行った。

自然談話の文法構築のための基盤として、自然談話資料の収集、転写作業と、その分析を行った。自然談話の中でも、接続詞と接続助詞が、会話の構造（話の重複、語りの継続と終結、フロア概念（話者が持つ会話の主導権）など）において、どのような役割を担っているか、会話の構造と接続表現との関わりについて考察した。日本語の節連鎖（岩崎・大野 2007「即時文・非即時文－言語学の方法論と既成概念－」）という文法構造では、述語動詞によって明瞭に区切られずに、節を複数回続けながら、複合ターン（Learner,1991 On the syntax of sentences in progress. Language in Society, 20:441-58.）を組み立てることができる。節連鎖における接続表現の機能を手がかりに、語りにおける会話の構造を扱った。語り部分においては、もっぱら一人の語り手が語り、他の会話参加者は聞き手にまわる。その間、聞き手はうなづきや受領の合図を送るのみで、発話ターンを取得しようとするような行動は見られない(Stivers, 2008 等)のだが、「ある時点」を過ぎた時、実質的発話を開始する。語りの終結部は通常の順番取りシステムが再開される時点であり、認識可能な形で終結が示唆されていると考えられる。語りの終結部における接続表現の機能を扱った。また、これまでの考察から円滑なターン交替に資する要素として、言語の持つ形式、意味、音声、使用文脈がどのように働いているか総合的に検討した。語りの終結部について、終結に関与するのは文法的特性（終止形)、語り内での意味、音調、文脈情報の 4 者であるが、これらが全て揃って終結している例は限られており、これら相互の関連が問題となる。この際、手がかりとなるのは文法形式としては中途終了形式であるにもかかわらず、語りの終結部に位置し、なおかつ実質的ターン交替が生じている事例である。

節連鎖の終結と節における接続形式を扱った。話者交替のある自発談話内で、もっぱら一人の語り手によって過去の体験、説明、物語が語られることがある。このような「語り」が行われる間、聞き手が発話を抑制するという現象については、Jefferson(1978)、山田(1999)、串田(1999)等広く言及されている。語りにおける話の開始と終了は、語り手による話の構成物だけではなく、聞き手側にも認知され、実質的発話の抑制（開始部分)、抑制の開放（終了部分）のためのシグナルとして働いている。

通常の会話部分では話者交替システム（Sacks, Schegloff and Jefferson; 1974）が作動しており、それぞれの話者が自分のターンを順番に話すことによって会話が構成されていくのに対して、語り部分は一人の話者が続けて長いターンを話すため、通常の会話から物語に移行するには、話者交替システムを停止させる手続きが必要になる（高梨他, 2004)。物語は会話内で生起し、話者交替システムの停止を伴うものであるため、物語の

終結後には話者交替システムを再作動させなければならない。言語コミュニケーション上で会話参加者が円滑かつ適切に話者交替を行いうるには、各話者は、それぞれが話す発話単位（turn）が潜在的に完結するであろう場所（possible completion point）を、ある程度予測しつつ会話を行っている（Sacks, Schegloff and Jefferson, 1974; 田中, 1999）。会話の潜在的完結点は、現話者が話し終わり、発話順番が他の話し手に移る機会となるため、この場所は移行適切場（TRP：turn relevant place）と呼ばれる。語りの開始部分は、聞き手にとってみれば、これから一定の長さの話が続くであろう心構えをもたらす場所であり、語りの終了部分は、潜在的完結点であり話者移行適切場（TRP）として次の話者がたちうる場所である。田中(1999)では、語りの終結後、次話者が実質的発話を開始した時点には、そこが潜在的完結点であり、TRP が訪れたという聞き手の理解が示されている、と述べられている。

そこで，語りの間中、もっぱら聞き手に回っていた会話参加者が、接続助詞、並立助詞等の中途終了形式の後に実質的発話を開始する現象を観察した。節を連鎖させて語りが継続する中で、なぜ特定の節の後に TRP が訪れるのか。これらの中途終了形式は、文法形式としては非完結性を示しているにもかかわらず、なぜ、潜在的完結点と見なされ、いったん停止された話者交替システム がこれらの形式の時点で再開するのだろうか。

形式的には中途終了の形式がどのように終結部と認識され、話者交替機構の再開箇所となっているか考察した。文法形式的に未完了である中途終了形式でターン交替が行われるということは、その発話に、（語り部分の）聞き手が TRP であると判断する要素を含んでいると考えられる。

現象は二つに分けられた。第一のパターンは、語りの山場→聞き手の受領表示→山場への補足や関係づけ（中途終了節）→実質的話者交替、となっているものである。

意味には、当該発話（中途終了形式の節）の意味に加え、語り内での位置づけが関わる。語り内で、内容的に山場を迎え、それを（語りの）聞き手が確認した後、中途終了形式によって補足している場合であった。このような例では、中途終了形式に内在する接続表現は、関係を表示する語類であるため、先行発話との関係を表示するのに優れており、このために多用されると考えられる。

TRP となっている箇所は、語りのオチや山場ではなく、山場を迎え、聞き手との確認後に、語り手が補足した発話末であった。このことから、聞き手は、語りの山場によって話者交替機構が再び思い起こされた後、適切な箇所まで発話を控えていると考えられる。語り手が語り終わることを、音調、身振り、他の拡張要素(終助詞等)で確認しつつ、TRP と判断しているのではないだろうか。

第二のパターンは、話し手による語りの終結の表示とそれに伴う聞き手への発話ターンの譲渡である。形式として文法的完結ではないが、使用文脈での完結（質問への答え等）、身振り、視線、音調等の要素を記述した。

円滑なターン交替に資する要素として、言語の持つ、形式、意味、音声、使用文脈は TRP の認定にどのように働いているか、という問いに対し、本研究は、文法形式としては中途終了形式であるにもかかわらず、実質的ターン交替が生じている事例について、TRP を決定する手がかりとして、言語形式、意味、音調といった要素を個々の事例に即して検討した。

文法的に完結しない形式による語りの終結を観察することにより、節連鎖構造の詳細な記述、とくに、終結部付近の観察を行った。節連鎖構造の終結は終止形またはほかの言い切りの形が典型的とされてきた（岩崎・大野 2005）が、語りの終結部の半数以上を中途終了形式が占めることを示した。これらの中途終了形式は「言いさし」文（白川, 2009）や中断節（suspended clause）構文（Ohori, 1995）、従属節の主節化（insubordination）（Evans, 2007; 堀江・パルデシ, 2009）の名前で扱われており、主節を伴わずに従属節が単独で一定の表現機能を持つ現象として知られている。一定の長さの語り内でのふるまいについて記述することは、中断節の談話機能の解明につながると考えられる。

節連鎖と音声情報，ジェスチャーとの関わりについて分析した。

会話は，言語のやりとりのみならず，視線，表情，ジェスチャー，パラ言語等，多くの側面の総体として成立している。相互作用的会話の中での発話解釈は，こうした複数の側面が統合した形で行われている。文法関係や語順など，文字で書き表せる情報に加えて，会話では，ポーズ，速さ，音調，声の大きさなど，音声の持つさまざまな側面が情報の焦点や話者の意図を伝えている。加えて，言語と共に産出されるジェスチャーや表情も発話解釈に寄与している。

一定の長さを要する「語り」の構造に音声特徴がどのように用いられているか考察し，単一の発話を超えた一定の長さの発話において，構造を表示する資源として音声が用いられることを示した。

まず語りの事例を示しながら，会話に付随して生じた「お茶を飲む行動」の観察を通して，語りの構造と，語りの達成に協働で参加する受け手の役割を論じた。そして，話者交替のある自発談話内において，語る行為の達成のために，ピッチ，母音引き延ばし，ポーズ，話速，強弱等の音響特徴がどのように言語資源として用いられているかを考察した。

語りの継続において節連鎖内で話速を織り交ぜること（e. g.対比するトピックをゆっくり言う，継続するために話速にメリハリをつける），単語内でのイントネーションの

上下が見られた。語りの節連鎖においては，継続デバイスは連鎖する節の末尾にあるが，連鎖の終了は，受け手によって察知される終結節の冒頭と途中に見られた。語り部分の受け手が実質的発話を開始する箇所を観察すると，直前の発話冒頭でのピッチ切り替えや途中で鍵となる部分の強調，話速の低下が見られた。語り部分の受け手の反応開始位置を調べると，終了部では節末イントネーションは弁別に関与していなかった。語り部分の受け手は語り手が全てを言い終わらないうちに，その節内の情報から反応を開始していた。

「語り」という一定の長さを要する言語単位での音声情報の役割は，局所的な音声特徴の分析では見えてこない現象である。書かれた談話においては，結束性の表示手段として，接続表現や新旧等の文脈情報を盛り込んだ名詞句の表し方など，研究の蓄積がなされている。しかしながら自発音声において言語情報（言語的意味）と音声特徴という 2 つの表現モダリティが構造表示に，どのように実現されているかについての考察はまだ限定されている。この他に，視線やジェスチャーなどの非言語的要素も用いられている。これらモダリティ間の組み合わせの問題や，どのような手段がどのように用いられるのかについては，言語内容に比べて研究の蓄積は非常に限定されているであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）
①甲田直美「語り内において連鎖する節の音声特徴：順番取りシステム再開位置との関連から」『認知言語学論考』査読有り，12，261-290，2015.3
②甲田直美「語りの達成における思考・発話の提示」『社会言語科学』査読有り，17-2,1-16, 2015.3
③甲田直美「文章・文体（理論・現代）」『日本語の研究』依頼論文，6-1，2014.7
④甲田直美「名詞修飾節による「語り」の終結－「みたいな」「っていう」の表現性と談話機能－」『言語の創発と身体性』，査読なし，ひつじ書房,pp.431-447.2013
⑤甲田直美「読解における仮説検証能力と自己モニタリング」『日本語・日本語教育の研究－その今、その歴史』，査読なし，スリーエーネットワーク,pp.15-27.2013
⑥甲田直美「「語り」の終結における中途終了形式」『文化』査読なし，76-3・4,pp.19-38.2013

〔学会発表〕（計　３　件）
①甲田直美「語り内において連鎖する節の音響特徴：順番取りシステム再開位置との関連から」，査読有り，言語科学会（Japanese Society for Language Sciences），文教大学，第 16 回年次国際大会(JSLS2014) 2014 年 6 月 28 日
②甲田直美「語り終結部における思考・発話の発露」査読有り，社会言語科学会第 32 回研究大会，信州大学，2013 年 9 月７日
③甲田直美「語りにおける節連鎖構造とターン交替 Clause chaining and turn taking in Japanese intraconversational narratives」，査読有り，第 8 回 日本語実用言語学国際会議 THE EIGHTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON PRACTICAL LINGUISTICS OF JAPANESE（ICPLJ8），国立国語研究所，2014 年 3 月 22 日

〔図書〕（計　１　件）
①甲田直美『自然談話文法構築のための、節連鎖構造に関する実証的研究』,平成 26 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書，100p，2015.3

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
甲田　直美（KODA，Naomi）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：40303763

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：